

「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」から学ぶもの

別府大学学長 西村 明

別府大学は、「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」（児童・生徒の国語力を高め、メディア活用能力を育成する指導力向上のための教員研修モデルカリキュラム開発プログラム）を2007年度に独立行政法人教員研修センターから委嘱を受け、大分県教育委員会のご協力・支援をえて実施しました。7月30日から7日間、大分県内の小中学校の教員及び児童・生徒47名が参加しました。その開発プログラムの実施状況とその成果はDVDに編集され、県内の小中学校に配布される予定であります。

この夏休みの期間に、児童・生徒はグループを作り、自ら調べ、読み、書き、話し、コンピュータの前で作業をしました。先生たちは、もどかしそうにそれを見ておられましたが、時には意見を述べるぐらいで、彼らの主体性と自主性を大切にしておられました。子どもたちは生き生きとして自らの課題に取り組みました。私は、このプログラムを始めるに際して、「とくに国語については、テレビ、インターネットなどのお陰で視聴覚的な意味において力がついているように思われますが、それらはほとんど既成の、マニュアル的な知識であり、豊かな創造力・思考力を高める上で十分であるとは言えません。やはり自ら調べ、読み、書き、話すことのなかで新たな事柄を発見し、考える中で他の人とは異なる創造力・構成力・思考力が身につくように思われます。」と述べましたが、今回のプログラムの実施を通して、このことの正しさを再確認しました。

まず、児童・生徒の発想の豊かさと感性の鋭さを学びました。彼らは、自分たちの目に入る（身近な）世界を通して現代の諸問題（環境や生態系の変化、社会生活のあり方など）を生々しく、しかも鋭く掘り下げました。低学年の小学生が次の世代を見据えて環境問題を論じたのには涙がでるほど感動しました。また、彼らは、非常に雄大な夢を持ち宇宙を見つめていることです。先生が上から課題を与え、学習の方法を教えていたらこのようにならなかったかもしれません。すべての児童・生徒がこのような成果を得たわけではありませんが、このすばらしい経験から先生が学び、すべての児童学生が有するその芽を育て、経験を普遍化することが今後の課題ではないでしょうか。

プレゼンテーションにおいても、プロジェクター等の先進的な映像機器を用いるのではなく、伝統的な（自ら絵具で紙に描き、説明する）方法での報告が大変新鮮に感じられました。なぜならば学習過程が明確に聴衆に伝わり、彼らの理解度を鮮明にしてくれたからです。先生方は、また、学習と指導について長時間討議し、経験を共有し合いました。学年や地域を越えて、先生方が現に展開している学習過程と指導について相互に検討し、新たな指導のあり方を模索している姿は、大学の教育の現場においても学び実践すべきものであると思えました。まだまだ残された問題は多いと思いますが、新たな教育指導方法の開発への第一歩を踏み出したのではないかと思います。このプログラムをさらに発展させ、教育現場で起こっている種々の課題の解決とそれに関連する教育指導の改善に貢献できることを期待しています。